

効果的な音声指導項目の提示とは —高等学校英語教科書分析から—

Effective Presentations of Pronunciation Instruction Items —From An Analysis of Japanese High School English Textbooks—

柳 田 綾
Aya YANAGIDA

抄録

本稿は、平成28年検定済の高等学校英語検定教科書において、発音に関する事項がどのように扱われているかを比較した。まず、教科書内のどこで発音指導事項が提示されているかに着目し、それぞれ発音記号、発音方法、強勢、イントネーション、連結・脱落・同化、ポーズの6項目がどのように扱われているかを分析した。結果としては、どの教科書も英語音声学の基本的理論を提示しており、中学校英語教科書には見られない学術的な解説をしている教科書もあることが分かった。しかし、教科書により指導項目の提示方法と重点の置き方には差異が見られた。分析結果に基づき、教科書を使用して発音指導を効果的に行うためには、音声指導項目の提示内容・提示方法がどのようなものであるべきかを提案する。

キーワード：高等学校英語検定教科書、音声学、発音指導

Abstract

The purpose of this research was to examine how phonetically related items were treated and presented in Japanese high school English textbooks. Ten high school English textbooks were compared and analyzed in terms of six phonetically related items: phonetic alphabets, manners of pronunciation, stress, intonation, connected speech, and identifying thought groups. The research showed that all the textbooks covered some of these categories, which correspond to the basic theories of English phonetics. The results also found that some textbooks provided more academic and theoretical explanation about phonetics, which were not found in junior high school textbooks. However, each textbook presented those six items differently and put different importance on each item. Based on the results of the analysis, the author suggests better ways to present phonetically related items in a textbook to conduct more effective pronunciation instruction.

Keywords: high school English textbooks, phonetics, pronunciation instruction

1. はじめに

高等学校から大学に移り、英語音声学の授業を担当することになった。大学生に発音を指導していて、過去に音声学の理論を学び、発音指導を受けたことのある学生は少ないように感じた。筆者が高校教師時代も発音指導は語彙指導と音読指導が中心で、個々の音の発音指導や発音記号は単発的に扱う程度で、日常的には行っていなかった。したがって、大学生が入学以前に発音や音声学を学んだ経験が少ないことは想定済みであった。しかし、大学生の音声項目学習履歴についてより詳しく調査するため、高等学校英語教科書における音声指導項目の提示について分析を行った。分析対象として、平成28年度検定済の高等学校コミュニケーション英語Ⅰの教科書6冊と、英語表現Ⅰの教科書4冊を選択した。まず、教科書内の音声指導項目が記載されている提示場所（巻頭・本課内・別セクション・巻末）に焦点を当てた。次に、発音記号、発音方法、強勢、イントネーション、音のつながり（連結・脱落・同化）、ポーズの6項目について分析した。

2. 研究の目的と背景

本稿の研究目的は、高等学校英語教科書における音声指導項目を分析することによって、音声項目を学ぶのに適した教科書とはどのようなものかを考察することである。先行研究としては、上田・大塚（2011）が中学校英語検定教科書における音声指導項目を調査している。出版社によって音声項目指導の扱いにはばらつきがあり、どの教科書を使うかによって学習者に影響があることを指摘している。同じく上田・大塚（2014）は新学習指導要領で3つの項目（発音、イントネーション、スピーチ指導）が追加されたことの影響で、それらに関するページや説明が教科書内で増加したと報告している。清永・小川（2006）は日本と韓国の中学校英語教科書をそれぞれ3冊分析しており、日本では音声指導項目が満遍なく網羅されているが、韓国の英語教科書では小学校英語教育の影響で教科書によって扱う事項に差が見られると論じている。また、有本（2002）は大学・一般用の英語発音教本7冊を比較し、語の発音からではなくリズムから始める、いわゆるトップダウン式の発音練習が効果的であると述べている。このように、中学校英語教科書と大学・一般用の発音教本における音声項目分析は存在するが、高等学校英語教科書の音声指導項目を調査した研究は見つけることができなかった。音声の「指導」に関する研究としては、手島（2011）が日本の中学校・高等学校における発音指導の現状と課題を現場での経験に基づき、具体的に指摘している。さらに、折井（2015）は中学校英語教員へのアンケート結果から、中学英語教師は現職研修で音声指導を学ぶ機会が少なく、指導に不安を感じており、その「不安感」が指導の妨げになっていると警鐘を鳴らしている。

高等学校英語教科書や高等学校における音声指導に関する研究が少ないこと自体が、高等学校において発音指導が重要視されていないことを表しているのかもしれない。しかし、2020年度からの大学入学共通テストにおいて英語は4技能型入試に移行することから、音声面の指導が今後ますます重要になることは明らかである。高校英語教師が検定教科書を使用して音声指導を行い、高校生の学習に適した教科書がどのようなものなのか、高等学校英語教科書分析結果を基に提案する。

3. 分析方法

分析対象としたのは、平成28年度検定済のコミュニケーション英語Ⅰの教科書6冊と、英語表現Ⅰの教科書4冊である。コミュニケーション英語Ⅰを分析した理由は、最も授業時間数が多く、教師と生徒両者にとって影響力が大きいと考えたためである。英語表現Ⅰでは、英語を話す・書くといった発信的活動が重視されているため、コミュニケーション英語Ⅰの教科書と比較して音声指導項目がより多く扱われているのではないかと予測したためである。分析したコミュニケーション英語Ⅰの教科書は、VISTA English Communication I New Edition (VI)、All Aboard! English Communication I (AA)、Revised COMET English Communication I (CO)、CROWN English Communication I New Edition (CR)、New Edition Grove English Communication I (GR)、BIG DIPPER English Communication I (BD)の6冊である。英語表現Ⅰの教科書は、Revised Vision Quest English Expression I Standard (VQ)、DUALSCOPE English Expression I (DS)、SELECT English Expression I (SE)、NEW ONE WORLD Expressions I Revised Edition (OW)の4冊を分析した。分析範囲としては英語の発音や音声について説明している箇所のみとし、新出単語として掲載されている各単語の発音は分析から除外した。分析項目は、1) 発音記号、2) 発音方法、3) 強勢、4) イントネーション、5) 音のつながり(連結・脱落・同化)、6) ポーズの6項目とした。付属のワークブックやCD、教師用マニュアルは分析対象としていない。

4. 分析結果

4.1 音声指導箇所

どの教科書にも、発音記号や発音の仕組みについての記述が見られた。音声指導箇所は、巻頭・本課(本課の冒頭・本課内・本課のまとめ)・別セクション・巻末の4箇所に分かれていた。指導箇所と指導項目をまとめたものが、表1・2である。

表1 コミュニケーション英語 I

教科書名	指導箇所	タイトル	指導項目 1) 発音記 号	指導項目 2) 発音方 法	指導項目 3) 強勢	指導項目 4) イント ネーション	指導項目 5) 音のつな がり	指導項目 6) ポーズ
VI	本課 (本課内)	「言ってみよう」 SAY IT!	○	×	○	○	○	○
	巻末	英語の音	○	△ 一部 のみ	×	×	×	×
AA	本課 (本課内)	Reading 1 音読にチャレンジ	×	×	○	○	○	×
CO	本課 (本課 の冒頭)	Let's Chant! 発音のヒント	×	○	○	×	○	×
CR	別セクショ ン	Sound Studio 1 音の連結・脱落・ 同化 2 文の区切り 3 矯正とリズム 4 イントネーション	×	×	○	○	○	○
GR	本課 (本課のま とめ)	SOUND PLAY	○	×	○	○	○	×
	巻末	発音のポイント	○	○	×	×	×	×
BD	巻頭	INTRODUCTION 2 英語の発音・ア クセント	×	×	○	×	○	×

表2 英語表現 I

教科書名	指導箇所	タイトル	指導項目 1) 発音記 号	指導項目 2) 発音方 法	指導項目 3) 強勢	指導項目 4) イント ネーション	指導項目 5) 音のつな がり	指導項目 6) ポーズ
VQ	本課 (本課 の冒頭)	Pronunciation	×	×	○	○	○	×
	巻末	付表19母音の発音	○	○	×	×	×	×
	巻末	付表20子音の発音	○	○	×	×	×	×
DS	別セクショ ン	WORKSHOP 2 for Pronunciation	×	×	○	○	×	○
SE	別セクショ ン	Speaking Station 発表のコツ	×	×	○	○	○	○
OW	巻頭	英語の発音で気を つけること	△ 一部 のみ	△ 一部 のみ	○	○	○	×
	巻末	発音記号の読み方	○	○	×	×	×	×

コミュニケーション英語 I においては、6冊中4冊が本課で音声に関するページを設けていた。一方英語表現 I では、本課で音声指導項目を扱っていたのは4冊中1冊にとどまり、他の3冊は巻頭・巻末に発音記号と発音方法を一覧表として掲載する方法か、別セクションにまとめていた。指導項目が教科書の中の「どの」部分で扱われているかは、教師に大きな影響を与える。教師が最も重視するのは授業の核である本課そのものである。本課に音声指導項目が記載されているのが望ましい。また、指導箇所が現れる頻度が多い方が教師、

生徒両者の目に留まりやすい。この観点から見ると、10冊中4冊のみが、2か所に分けて音声指導項目を提示しており、残りの6冊は1か所のみ音声指導項目を提示していたことが分かった。

4.2. 発音指導項目

4.2.1 発音記号

次に、各教科書で母音・子音の一覧表を掲載していた4冊（VI, GR, VQ, OW）において、どのような発音記号が使用されているかについて分析した。新出単語のスペルと発音記号を表記している箇所は、分析対象としていない。上田・大塚（2011）と小川（2002）に倣い、教育的表記法である22の母音と24の子音について調査した。結果として、一覧表に於ける発音記号の提示は、出版社によって差異が見られた。最も多くの発音を提示しているのが

表3 一覧表による母音の提示

	VI	GR	VQ	OW	提示率(%)
i:	○	○	○	○	100
i	○	○	○	○	100
e	○	○	○	○	100
æ	○	○	○	○	100
ə	○	○	○	○	100
ʌ	○	○	○	○	100
ər	×	×	○	○	50
u:	○	○	○	○	100
u	○	○	○	○	100
ɔ:	○	○	○	×	75
ɑ	○	○	○	○	100
ɑ:	×	×	○	○	50
ei	○	○	○	○	100
ai	○	○	○	○	100
au	○	○	○	○	100
ou	○	○	○	○	100
ɔi	○	×	○	○	75
iər	○	×	○	○	75
eər	○	×	○	○	75
uər	○	×	○	○	75
ɔər	×	×	×	×	0
ɑər	×	×	×	×	0
カバー率(%)	81.8	63.6	90.9	86.3	

注：VISTA に ə:r, ɑ:r は有り

VQ で、子音のカバー率は100%であった。出現率に関しては、GRが二重母音 oi と三重母音を取り扱っておらず、 $[\text{ɔər}]$ $[\text{aər}]$ はどの教科書にも提示されていなかった。 $[\text{ər}]$ はVIでは $[\text{ə:r}]$ 、VQとOWは $[\text{ər}]$ と表記していた。 $[\text{ɔər}]$ は $[\text{ɔ:}]$ (VI, GR, VQ)、 $[\text{aər}]$ は $[\text{a:r}]$ (VI) や $[\text{a:}]$ (VQ, OW) と表記されている。したがって、上田・大塚 (2011) の分析結果が指摘しているように、発音表記が各社によって異なることが分かった。子音に関しては、 $[\text{h}]$ 、 $[\text{w}]$ 、 $[\text{j}]$ 、子音連続を提示していない教科書が見られた。 $[\text{h}]$ 、 $[\text{w}]$ 、 $[\text{j}]$ は比較的日本語と似た発音であり、提示する重要度があまり高くないためであると考えられる。

表4 一覧表による子音の提示

	VI	GR	VQ	OW	出現率 (%)
p	○	○	○	○	100
b	○	○	○	○	100
t	○	○	○	○	100
d	○	○	○	○	100
k	○	○	○	○	100
g	○	○	○	○	100
f	○	○	○	○	100
v	○	○	○	○	100
θ	○	○	○	○	100
ð	○	○	○	○	100
s	○	○	○	○	100
z	○	○	○	○	100
ʃ	○	○	○	○	100
ʒ	○	○	○	○	100
h	○	×	○	×	50
tʃ	○	○	○	○	100
dʒ	○	○	○	○	100
m	○	○	○	○	100
n	○	○	○	○	100
ŋ	○	○	○	○	100
l	○	○	○	○	100
w	○	×	○	○	75
r	○	○	○	○	100
j	○	×	○	○	75
子音連続	×	×	hw dz ts	×	25
カバー率 (%)	95.8	83.3	100	91.7	

4.2.2 発音方法

具体的な発音方法について示していたのは、VI、CO、GR、VQ、OW の 5 冊であった。VI では巻末に発音記号とカタカナ表記、その発音が含まれる語を各音につき 2 単語記載していた。ただ、発音方法が提示してあったのは 20 の母音のうち 7 つ、24 の子音のうち 6 つについてのみであった。GR、VQ、OW は巻末に発音記号表と発音方法を具体的に説明しているが、顔や舌のイラストは記載されていない。最も特徴的だったのは CO である。他の 4 冊は巻末の一覧表で発音記号とともに発音方法を説明する形式であったが、CO は本課の冒頭に “Let’s Chant!” と称して例文を 2 文挙げている。例文内でターゲットになった音を、「発音のヒント」コーナーでイラストとともに具体的に段階を追って発音方法を説明している。このように CO で説明されている音は l/r、f/v、w、s/sh、p、t、th (θ/ð)、k、ch (tʃ)、m/n の 16 個の子音のみであり、母音の発音方法についての記載はなかった。しかし、これらが本課内に掲載されているため、本課を学習する際毎回教師と生徒の目に触れやすい。さらに、イラスト付きで具体的に発音する方法が分かりやすい点が特筆すべき点である。

表 5 強勢の提示

	VI	AA	CO	CR	GR	BD	VQ	DS	SE	OW
語強勢	(´)	×	×	×	×	巻頭： (´) (˘)	本課：強く読まれる部分を○で囲む 巻末： (´)	×	×	大小のオレンジ色の丸
文強勢	(・) 小さい黒丸	(・) 小さい黒丸 ……強く読む	太字＝強く読む	(・)(●) 小さい黒丸と大きい黒丸	(・)(●) 小さい黒丸と大きい黒丸	(・)(●) 小さい黒丸と大きい黒丸	強く発音される部分を○で囲む	(・)(●) 小さい黒丸と大きい黒丸、強弱(太字、細字)、つながり表現	(・) 小さい黒丸	大小の丸(オレンジ色)
解説*	×	×	○	○	○	○	×	○	○	○

*解説の内容と箇所

CO：太字＝強く読む（本課）

CR：英語のリズムは、基本的には、強く発音される音（強勢）が、一定の間隔を置いて反復されることによって作られます（別セクション Sound Studio）。

GR：英語では、強く発音される部分と弱く発音される部分が、原則として交互に現れます。……内容語は、強く発音するのが基本です（LESSON 1）。機能語は、すばやく弱く発音するのが基本です（LESSON 2）。文の内容とストレス：状況によっては、機能語が強く発音されることもあります（LESSON 10）。

BD：強く読む語（内容語）、弱く読む語（機能語）（巻頭）

DS：英語のリズムは、センテンスの中での強弱（太字、細字）と単語の中での強弱（●、・）から生まれます（別セクション SEMINAR ①、WORKSHOP ②）。つながり表現は、文中の他の部分と読む強さやポーズの長さが異なります（SEMINAR ①、WORKSHOP ②）。

SE：強調したい言葉を強く発音する（別セクション Speaking Station1）、重要な部分はゆっくり話す（Speaking Station2）。

OW：（語強勢）英語単語を発音するときには、音節の数を意識しながら、強勢が置かれている音節を強く長く発音しましょう。（文強勢）英文を発音するときも、単語を発音するときのように、なるべく一つの息で、強勢が置かれる部分を強く長く発音しましょう（巻頭）。

4.2.3 強勢

強勢に関しては、語強勢と文強勢に分けて分析した。語強勢に関しては、10冊中1冊が大小の丸で、2冊が強勢記号を付けて強勢の強さを表していた。VQはリスニング問題として、強く読まれた部分を○で囲む形式であった。その他の6冊は、語強勢について言及していなかった。

文強勢に関しては、太字(1社)、小さな黒丸(3社)、大小の丸(4社)、大小の丸と太字細字の併用(1社)、強く読まれた部分を○で囲む(1社)という結果であった。どの教科書においても強勢記号だけでなく、視覚的に強弱が分かりやすいように文字を太字にし、大小の丸を使用するなどの工夫が見られた。また、英語の強弱のリズムについては3社が、内容後・機能語については2社が解説を掲載していた。上田・大塚(2011)によると、中学英語教科書では強弱のリズムになるよう注意喚起したものや、内容語と機能語に関して説明しているものは無かったとのことだが、高校英語教科書では上記の説明をしている教科書が10冊中5冊あり、高校ではより理論的・学術的に文強勢に関する解説がなされていることが分かる。

4.2.4 イントネーション

イントネーションに関しては、教科書によってかなりのばらつきが見られた。COとBDは全く取り扱いが無く、DSとSEは1項目、AAは2項目しか扱っていない。最も多くのイントネーション項目を提示しているのはVIで、本課内に例文と矢印を示している。次に多

表6 イントネーションの提示

	VI	AA	CO	CR	GR	BD	VQ	DS	SE	OW	提示率 (%)
肯定・命令文	○	×	×	○	○	×	○	×	○	○	60
Yes-No 疑問文	○	○	×	○	○	×	○	×	×	○	60
疑問詞疑問文	○	×	×	○	○	×	○	×	×	○	50
選択疑問文	○	×	×	○	○	×	×	×	×	○	40
付加疑問文	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	10
列挙	○	×	×	○	○	×	×	○	×	○	50
聞き返し、繰り返し	○	○	×	×	×	×	○	×	×	×	30
呼びかけ	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	10
その他	×	×	×	○*	○ 感嘆文	×	×	×	×	○*	30
カバー率(%)	88.9	22.2	0	66.7	66.7	0	55.6	11.1	11.1	66.7	

*その他の例：

(CR)：下線を引いた語に強勢を置き、イントネーションを変えて読んでみましょう。その際に、意味がどのように異なるかを考えなさい。(1) a. This is my book. b. This is my book. c. This is my book. (2) a. Jane couldn't go. b. Jane couldn't go.

(OW)：疑問詞で始まる疑問文の場合も上げ調子で終わる場合もある。尋ね方が柔らかくなる。

くの項目を提示しているのは CR、GR、VQ である。CR は別セクションに「イントネーション」「発音のヒント」について 1 ページを割いている。GR は本課のまとめの部分に“SOUND PLAY”と称して、文の種類によってイントネーションが異なり、イントネーションは「声の高さの変化」と説明している。項目別に見ると、肯定・命令文・Yes-No 疑問文（60%）、疑問詞疑問文・列挙（50%）、選択疑問文（40%）といった基本的な例が取り上げられている。イントネーションの高低を表すためには、すべての教科書が矢印（↗）（↘）を使用しており、イントネーション・ラインを用いている教科書はなかった。また、提示の仕方に工夫が見られたのは VQ である。他の教科書はすべて「例文＋矢印（＋説明）」という形でイントネーションを提示していたが、VQ は本課の始めに問題演習を示し、上昇調か下降調かの矢印を書き込ませる形であった。このように問題演習として提示すると、教師も授業時間内で取り上げやすく、音声項目について解説する機会が増えると思われる。

4.2.5 音のつながり

音のつながりに関しては、連結・脱落・同化・その他の 4 項目について比較した。それらを表す記号は 8 冊がスラー（ ）を用いており、VQ は問題演習として連結・脱落・同化が起きている音声をリスニングし、単語を記入する形式をとっていた。CR、BD、OW においては連結・脱落・同化に加えて子音連鎖（CR）、機能語の弱形（BD、OW）について触れて

表 7 音のつながりの提示

	VI	AA	CO	CR	GR	BD	VQ	DS	SE	OW	提示率 (%)
記号	—	—	—	—	—	—	なし	なし	—	—	80
連結	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	90
脱落	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○	80
同化	×	×	×	○	○	○	○	×	×	○	50
その他 ^{*1}	×	×	×	○*	×	○*	×	×	×	○*	20
解説 ^{*2}	×	△	△	○	○	△	△	×	△	○	
カバー率 (%)	50	50	50	75	75	100	75	0	25	100	

^{*1} その他の詳しい内容

(CR)：「発音のヒント」に子音連鎖について解説あり。
 (BD)：I can (△キャン→クン) go, ask her (△アスクハー →アスカ)
 (OW)：強形と弱形 and... [ænd] / [n], can... [kæn] / [kən]

^{*2} 各教科書の解説

(VI) 解説なし。
 (AA) つなげて読む。
 (CO) 音をつなげる。
 (CR) 発音記号付きで解説あり。
 (GR) 発音記号付きで解説あり。
 (BD) つながる音、消える音、変わる音。カタカナ表記。
 (VQ) つながる音、変わる音、聞こえなくなる音。
 (DS) 音のつながりについての提示・解説共になし。
 (SE) 語と語をつなげて発音すると英語らしく聞こえるよ。
 (OW) 発音記号付きで解説あり。

いた。一方で、VI はスラーを表記しているものの解説は無く、DS は音のつながりに関する項目が全く見られなかった。項目別には、連結、脱落、同化の順で多く提示がなされていた。これは、連結は前の語の語末と次の語の語頭が文字通り「つながって」おり、最も理解しやすいためだと思われる。しかし、連結、脱落、同化の違いを詳しく解説しているのは CR、GR、OW の 8 冊中 3 冊のみであった。他 2 冊は「つながる音、消える音、変わる音」という簡単な定義のみ、残り 3 冊は全て「つながる音」という説明のみであった。したがって、教科書によって音のつながりの理解度には大きな差が生まれる可能性がある。具体的には、連結・脱落・同化について全く学ぶ機会が無い、または連結・脱落・同化それぞれの違いが不明確のままきちんと理解されない可能性がある。

4.2.6 ポーズ

文の途中の区切りであるポーズに関しては、どの教科書でもあまり重点を置いて取り上げられていなかった。ポーズの記号としては 10 冊中半分の 5 冊がスラッシュ (/) を用いており、残りの 5 冊には区切りを表す記号が見られなかった。解説を付けていたのは CR、DS、SE の 3 冊で、SE は「意味のまとまりで区切って読むと分かりやすくなる」という簡単な解説のみであった。DS は解説に加えて「意味のまとまりに注意して聞く、読む」というエクササイズも設けていた。最も詳細な解説があったのは CR で、フレーズ・リーディング、スラッシュを入れるポイント 5 つ、文の区切りについての説明と、エクササイズ 2 題に約 2 ページを割いていた。

表 8 ポーズの提示

	VI	AA	CO	CR	GR	BD	VQ	DS	SE	OW	提示率 (%)
記号	/	なし	なし	/	なし	/	なし	/	/	なし	50
解説	×	×	×	○	×	×	×	○	○	×	30

5. まとめと考察

音声指導項目 6 項目を分析した結果、上田・大塚 (2011) が指摘するように、各教科書により音声指導項目の扱いの差異が大きく、発音記号表記もいくつか異なることが明らかになった。

まず、音声指導箇所については 10 冊中 5 冊が本課内で音声に関するページを設けていた。また、指導箇所を 2 箇所に分けて提示しているのは 10 冊中 4 冊であった。上田・大塚 (2014, p. 11) が「一か所にまとめて音素を提示するよりも、ページを変えて何度か提示の方が学習は効果的ではないだろうか」と指摘しているように、1 箇所に合わせてではなく複数回提示の方が、学習する機会が増えて学習者にとって効果的だと思われる。また、音声指導項

目は巻頭・巻末・別セクションよりも本課内に設けた方が教師と学習者の目に触れやすい。しかし、そのような提示方法である教科書は約半数であることが分かった。特に英語表現Ⅰにおいては、本課では文法事項や文法練習問題に多くのページが割かれ、音声指導項目は巻頭・巻末といった本課外に配置されており、教師・学習者が学習に使用する機会は少ないと推測される。

次に発音記号については、母音と子音の一覧表を提示していたのは VI、GR、VQ、OW の 4 冊のみであった。発音記号の提示は、子音については 8 割以上カバーされていたものの、母音はカバー率に差が見られた。また、記号の表記方法もいくつかの音素で差異が見られた。VI は一部の音についてのみ解説があったが、他の GR、VQ、OW は一覧表内のすべての音についてどのように各音を発するかについて説明がなされていた。しかし、図やイラストはどの教科書にも記載されていなかった。発音記号が表す音を文字のみで理解することは容易ではないため、図やイラストで口内の舌の位置や息の出し方を示すべきだと考える。

発音方法に関しては、半数の 5 冊が具体的な発音方法を示していた。しかし、5 冊中 3 冊が巻末に発音記号表と発音方法を説明しているものの、前述したように顔や舌のイラストは掲載されていなかった。したがって、教師が毎回の授業で巻末の発音一覧表を活用しない限り、学習者が一覧表を使用して発音練習を行うことはほとんどないであろう。一方、VI と CO の 2 冊は本課内にターゲットとなる発音を紹介しており、VI は発音方法の説明は無いが、CO にはイラスト付きで解説がなされている。本課を学習するたびにターゲットとなる発音とその発音方法がイラストや図とともに提示してあれば、教師が指導する回数は自然に確保でき、指導もしやすいものと推測される。

強勢については、語強勢よりも文強勢について重点が置かれていることが分かった。語強勢の扱いが少ない理由としては、本課内で新出単語を導入する際に語彙の発音・アクセント指導が行われており、別セクションで指導する必要性が少ないためであると考えられる。文強勢についてはすべての教科書で太字や大小の黒丸を用いて視覚的に強勢の強弱を表現していた。DS は英語には強弱のリズムがあること、CR、GR は強弱のリズムが交互に現れることについて言及している。また、GR と BD では内容語は強く発音され、機能語が弱く発音されることについての説明が見られた。高等学校では中学校と異なり、音声指導項目を文法項目の知識と関連させ、より学術的な指導が行われていることが分かった。

イントネーションについては、各教科書に置いて重点の置き方に大きな差が見られた。コミュニケーション英語Ⅰの教科書である CO、BD にはイントネーションに関する記載が見られなかった。英語表現Ⅰの教科書である DS と SE に置いても、カバー率は 11.1% とかなり扱いが軽い。対照的に、VI はカバー率 88.9%、CR、GR、OW のカバー率は 66.7% と、多くのイントネーション項目を網羅していた。高等学校学習指導要領のコミュニケーション英

語 I には「リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら聞いたり話したりすること」、英語表現 I には「リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら話すこと」が言語活動を行う際に配慮する事項として挙げられている。しかし今回の分析から、学習指導要領にイントネーションについて記載があるにもかかわらず、イントネーション項目については教科書間で扱いに差異が見られることが明らかになった。

音のつながりに関しては、10冊中8冊がスラーを用いて音と音が繋がっていることを示していたが、連結、脱落、同化の違いを詳しく解説していたのは10冊中3冊であった。他の7冊では簡易な説明か、音のつながりについて全く解説が見られなかった。上田・大塚(2014)の分析によれば、中学校英語教科書分析では音変化が起きる規則やしくみについての説明がほとんどないとのことだが、高校では理論的な解説を行なっている教科書もいくつかあることが分かった。連結・脱落・同化について解説をしているのはCR、GR、OWの3冊であったが、それぞれCRは別セクション、GRは本課のまとめ、OWは巻頭に掲載してあった。前述したように授業の中心となるのは本課であるため、本課から離れた場所(巻頭・別セクション・巻末)に掲載してある場合、教師はそれらを指導する機会を逃しやすい。また、説明のみが掲載されていると、教師も生徒もそれを「読んで終わり」にしてしまいがちである。VQのように音のつながりを問題演習形式で示すと、生徒も実際に問題を解くことを通して理解が深まると思われる。

ポーズについては、10冊中半分の5冊がスラッシュ(/)を表記していたものの、解説があったのはCR、DS、SEの3冊のみで、どのような時にスラッシュを入れるのか詳しく説明していたのはCRのみであった。上田・大塚(2014)が、区切りはより長い文章を扱う高等学校で積極的に指導の中心となっているのではないかと推測しているが、確かに意味の区切りを意識して読解する、音読することは高等学校でよく行われている。しかし、筆者の経験では「どこで」区切りを入れるのかという理論的な解説はあまり行われず、すでにスラッシュの入った文章を読むか、教師が指示をした箇所に生徒がスラッシュを入れることが多い。「どこで」スラッシュを入れるのか解説を行ってからフレーズ・リーディングなどの活動を行う方が、区切りに関して理解はし易いと思われる。しかし今回の分析結果から、区切りについて詳細な説明をしていたのは1冊のみであることが分かった。したがって、より多くの教科書で区切りについて詳細かつ理論的な説明を掲載する必要性があることを感じた。

6. 提案と今後の課題

高等学校英語教科書における音声指導項目の提示場所と、6つの音声指導項目に関する分析を行った結果、全ての教科書において発音に関して様々な項目が提示されていることが分

かった。しかし、教科書によって教科書のどこに音声指導項目を提示し、どの指導項目に重点を置いているかにはかなりの差異があることが明らかになった。提示場所に関しては、半数の教科書が本課外という教師の目が届きにくい場所に提示されていた。毎回授業の中心となる本課の中に音声指導項目を提示した方が、教師がそれを指導する可能性が高いと考えられるため、音声指導項目は本課内にあることが望ましい。また、「本課のまとめ」としてVQが示しているような生徒が実際に解答できる発音練習問題を設けるのも良いだろう。「本課のまとめ」にある練習問題は、授業でもよく取り扱われ、宿題として課されることも多い。巻頭・別セクション・巻末といった本課の外に音声指導事項がある場合は、別途「発音チェックリスト」を教科書会社（または教師）が作成し、発音できた語を教師と生徒がチェックする欄を設けるのはどうだろうか。さらに、発音記号一覧表を生徒のノートに貼り付けることができるよう、巻末の発音記号一覧表に切り取り線を付けるなど、ちょっとした工夫を加えることが生徒の動機付けにつながると考えられる。

教科書内の目が届きやすい場所に、わかりやすく具体的な記載があると教師は指導しやすく、生徒も理解がしやすいであろう。しかしどの教材を使用しても、有本（2002）が指摘しているように、教材を扱う教師の役割が最も重要である。また、有本（2005）は文法など他の学習項目とは異なり、発音は自習が困難であることを指摘している。したがって、静（2009）が実践している「グルグルメソッド」のように、教師が生徒に明示的・直接的な発音指導を行うことが望ましい。筆者も英語音声学の授業でグルグルメソッドを実践しているが、受講している大学生は「発音向上にはグルグルメソッドが最も効果的である」とアンケート調査で回答している。今後は高等学校の授業における音声指導の実態をより詳細に把握するため、文法などの他の指導項目と比較して音声指導をどの程度重視しているか、パフォーマンステストに音声項目がどの程度含まれているかなどをアンケート調査により分析することも必要である。また、優れた成果を上げている高等学校の授業を観察し、どの音声指導項目をどのように指導しているかについて分析することも有益であろう。さらに、高校教師が高等学校で活用できる音声指導方法や、利用できる視聴覚教材、インターネットサイト、ソフトウェア、アプリケーションなどを調査し、それらを高校教師に伝えることも進めていきたい。

参考文献

- 有本純（2002）「英語の発音指導における教材の在り方」『関西国際大学研究紀要』3, 1-13.
有本純（2005）「発音指導における教師の役割—怪しい発音指導の正体—」『英語教育』大修館書店, 54(10), 27-29.
上田洋子・大塚朝美（2011）「発音と音声のしくみに焦点をあてた中学校英語教科書分析—インプットの基礎を考察する—」『大阪女学院大学紀要』7, 15-32.
上田洋子・大塚朝美（2014）「中学校英語検定教科書における音声指導項目の分析—新旧学習指導

- 要領での扱いの変化について」『大阪女学院大学紀要』10, 1-15.
- 小川直義 (2002) 「教育的発音表記について」『英語音声学』(5), 389-403.
- 折井 (秋田) 麻美子 (2015) 「英語音声教員研修の必要性—発音指導に関する中学校教員の意識調査から—」『早稲田大学教育・総合科学学術院 学術研究 (人文・社会科学編)』63, 203-222.
- 清永克己・小川直義 (2006) 「日本と韓国の中学校英語教科書における効果的な発音指導に関する比較研究」『九州英語教育学会紀要』34, 11-20.
- 静哲人 (2009) 『英語授業の心・技・体』東京：研究社
- 手島良 (2011) 「日本の中学校・高等学校における英語の音声指導について—発音指導の現状と課題—」『音声研究』第15巻第1号、31-43.
- 文科省 (2009) 『高等学校学習指導要領』

高等学校英語検定教科書 (平成28年度検定済)

『VISTA English Communication I New Edition』	東京：三省堂
『All Aboard! English Communication I』	東京：東京書籍
『Revised COMET English Communication I』	東京：数研出版
『CROWN English Communication I New Edition』	東京：三省堂
『New Edition Grove English Communication I』	東京：文英堂
『BIG DIPPER English Communication I』	東京：数研出版
『Revised Vision Quest English Expression I Standard』	大阪：啓林館
『DUALSCOPE English Expression I』	東京：数研出版
『SELECT English Expression I』	東京：三省堂
『NEW ONE WORLD Expressions I Revised Edition』	東京：教育出版